

霊の戦いでしっかり立つ

エペソ 6:10-12

中心聖句：エペソ 6:12 「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、・・・もろもろの悪霊に対するものです。」

神と主イエスがいつも私たちとともにいてくださることを感謝します。今週のメッセージは、私がさせていただくことを申し出ました。来週は別の人がメッセージを語ってくれます。

この一週間は、たいへんな一週間でした。OICのすべての人にとって辛いときです。何が起きているのだらうと思っている人もいるでしょう。なぜこのようなことになったのかと思っておられるかもしれません。一連の出来事に対する意見はさまざまだと思いますが、全員がうなずけることがひとつあります。私たちが大きな霊の葛藤の只中にいるということです。

今日の聖書箇所は、私たちがお互いと争い合っているのではないと語ります。私たちが直面する本当の課題は、霊の力との格闘です。私たちはどうすればよいのでしょうか。この短い3節の中に、注目すべきことが少なくとも3つ示されています。

1. 主にあって、主の大能の力によって強められる。
2. 悪魔の策略に立ち向かう。
3. 血肉に対する戦いではなく、霊の領域での戦いであることを覚えておく。

主にあって、主の大能の力によって強められる。

「天路歷程」という本を読んだことがある人はいますか。この本は数百年前に書かれたもので、言葉が少し難しい部分もありますが、改訂版もあります。私はこの本を皆さんにお勧めします。著者のジョン・バニヤンは牧師で、教会の信徒たちが自らの信仰の歩みを理解できるようにとこの寓話を記しました。主人公はクリスチャンという名の男性です。クリスチャンは、破滅の町に住んでいました。クリスチャンにはある悩みがありました。それは、背中に背負った重荷を降ろせないことでした。それは、彼の罪の重荷でした。彼は自分が死にゆく運命だと知っていました。死の恐怖に苦悩し、声をあげて泣きました。

ある日、エバンジェリスト（伝道者）という名の人が来て、クリスチャンに天の都、つまり天国への道を教えました。そこに行くには、クリスチャンはまず長い旅路を歩まなければなりません。それは彼の巡礼の旅となりました。最初の行き先は、十字架でした。そこで、イエスがクリスチャンの背中から重荷を取り去ってくださいました。クリスチャンは大喜びでした。罪から解放されて、踊ることだってできるのです。ただし、旅はまだ続きます。その後、クリスチャンは城にたどり着き、そこで武具を受け取ります。かぶと、胸当て、ベルト、剣、特別な履物、そして盾でした。彼はこの城でしばらく幸せに過ごし、天の都や主人について習いました。この主人とは、彼の旅路を整えてくださったお方です。

ついに、城を後にする日がやってきて、クリスチャンは再び天の都を目指して歩き始めました。城を出てもなく、彼は屈辱の谷にやってきました。そこで起こったことを私は忘れることができません。彼はクリスチャンです。救われた人です。彼は天の都、つまり天国を目指していました。どうしてその彼が、屈辱の谷を通らなければならなかったのでしょうか。その谷で、クリスチャンはアポリオンという悪魔に出会います。悪魔は、クリスチャンが出ていった破滅の町の王子でした。悪魔は怒りを露にして言いました。「おまえはわたしの民だ。この町を離れることはできない」と。クリスチャンは、「私はもはや悪魔の民ではない。イエスのものになったのだ」と悪魔にきっぱり答えました。

こうして戦いが始まりました。悪魔は火の矢をクリスチャンに向かって放ちます。ほとんどは、クリスチャンの盾に当たりましたが、何本かはすり抜けてクリスチャンに当たりました。悪魔は剣を振り回しながら近寄ってきます。悪魔は巨大な龍です。クリスチャンよりはるかに大きくて強いのです。

それでもクリスチャンは屈しません。ついに、悪魔の強力な押しでクリスチャンは地面に倒れました。悪魔は、クリスチャンが自分のものでなくなるのなら、殺してしまったほうがましだと叫びました。そして、クリスチャンにとどめを刺そうと剣を振り上げた時のことです。クリスチャンは叫びました。「私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がる。」(ミカ書 7:8) そして、悪魔である龍の腹に剣を刺したのです。悪魔は大きな叫び声をあげて逃げ出しました。神は、クリスチャンを手当てし、傷をすべて癒してくださいました。

クリスチャンはまた旅を続け、天の都にたどり着くまでに多くの冒険を経験しました。その詳しい内容に興味のある方は、どうぞこの本を読んでみてください。

この戦いのシーンを読んで、私たちが悪魔に立ち向かうためには聖書を用いなければならないと深く教えられました。聖書をあまり知らなかったら、ちゃんと用いることができるでしょうか。そううまくはいきません。日本は、聖書がどこでも手に入るという恵まれた環境です。いつの時代も聖書が手元にあったわけではありません。ギリシャ語、ヘブル語、ラテン語以外の言語で聖書を出版しようとして命を失った人もいます。現代でも、聖書を持っていることを隠さなくてはならない場所が世界にはあります。私たちには神のみことばが目の前に与えられています。私たちがみことばを読んで、その内容に思いをめぐらすなら、みことばには力があります。サプリメントを摂ったり、筋トレをしたりするのと似ています。私たちを強いクリスチャンにしてくれるのです。聖書を持ち歩いたり、机の上に置いておくだけではいけません。中身を読む必要があります。聖書は神のみことばですから、読んで学ぼうとするときに、示されるべき真理へと導いてくださるよう、神に祈ってください。そうすれば、聖霊が知恵や知識を与えてくださいます。

神の知識を積み上げましょう。そして常に祈り、信仰を持ちましょう。私たちはひとりぼっちではありません。助けが必要なとき、神がそこにいてくださいます。ですから、神の御力に頼ればよいのです。イエスを受け入れたなら、私たちは救われています。いのちの書にその名がすでに記されています。けれども、クリスチャン人生を生きるとは、死んだときに天国に行くというだけにとどまりません。この地上で命を与えられている間、どのように生きるかも重要です。人を恐れた人生もあります。教会の人さえ恐れてしまう人生もあるでしょう。しかし、この個所は私たちに、主にあって強められなさいと語ります。神の力によって前進しなさいと語ります。

キリストにある人は、神の聖霊が内側に与えられています(エペ 1:13)。聖霊が私たちに証印を押してくださったのです。聖霊は私たちを導いてくださいます。どこにいてもそのことを覚えていてください。そして、恐れなくてください。さらに、聖書は神の御使いが私たちを取り囲んでいると語ります。「【主】の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。」(詩篇 34:7)とあります。いつもはそのことを意識していなくても、キリストにある私たちはひとりぼっちではありません。今この場所でも、御使いたちが私たちとともにいます。御使いに祈ったり拝んだりはしませんが、神が私たちを守るためにここに送ってくださった存在です。霊的な攻撃から守ってくれる場合もありますし、実際の身の危険から守られる場合もあります。

ランディ・アルコムは、聖書のみことばを基に、天国について多くの著書を記しています。あるフィクション作品には、死んで天国に行ったクリスチャンの男性が描かれています。彼は、地上での人生で長年いっしょにいてくれた天使と出会います。目には見えなくてもずっと一緒にいてくれた神のしもべとどうとう会って話すことができるのは、なんと喜ばしいことでしょうか。いつの日か、私たちもそのような喜びに与ります。

皆さんが問題に直面したとします。例えば職場での問題としましょう。神は皆さんの味方です。私たちは、内に住まわれる聖霊とともにその問題に立ち向かいます。また、御使いが後押ししてくれます。心強いと思いませんか。そこから私たちの信仰や力が湧くのです。私たちが弱いのは、強くなれないからではありません。神を信頼できないからです。また私たちとともにいてくださるという神の約束を信じきれていないからです。神がお約束通りにともにいてくださると確信できれば、どんなことに直面しようと毅然としていられます。奉仕も、苦難も、戦いもしっかりと強く受け止められます。

悪魔の策略に立ち向かう。

悪魔は狡猾です。エデンの園では蛇の姿でやってきて語りかけ、神のことばを巧妙に捻じ曲げました。

黙示録 12:9 には、全世界を惑わす古い蛇と記されています。人を誘惑するのはお手の物です。悪魔は嘘をつきます。悪魔は偽りの父です（ヨハネ 8:44）。

私たちは悪魔の手に乗る必要はありません。悪魔はこの地球より昔から存在し、ずる賢いですが、神と同等ではありません。悪魔は神に逆らった神の被造物です。ですから、イエスの内にある私たちには、悪魔を恐れる必要はありません。

ヤコブは、「悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」（ヤコブ 4:7）と語ります。そのとおりです。悪魔に屈してはいけません。

悪魔は世界のほら吹きです。私は昔犬を恐れていました。私が十代のころ、近所に犬を飼っているお宅がありました。その家の前を通って出かけることが多かったのですが、たまにその犬がつかないことがありました。何事もなく通り過ぎられるか心配で様子を伺いながら、前を通ったものです。というのも、よくその犬は足でも噛みちぎってやろうと言わんばかりの勢いで吠えながら走ってきたからです。もちろん噛まれたくはありません。背を向けて去ろうとすると、その犬は近くに飛び出て来て、今にも噛みついてきそうな様子です。私が立ち止まって犬を見つめると、犬もその場に立ち止まって吠えつづけます。私はゆっくりその家の前を通り過ぎます。一步一步立ち止まって犬を見つめ、少し待ってもう一步、そしてまた犬を見つめるといった具合です。その一軒の家を通り過ぎるのに5分以上かかったこともありました。距離にすれば30メートルほどです。その家の前を通り過ぎると、犬はさっさと家の前に引き返して行きます。この対処法にはうんざりしました。犬を怖がっていることを犬に悟られてはいけない、さもなければ攻撃される、と聞いたことがあったので、それを実践することにしました。犬に自分の一日を煩わされるのはやめることにしたのです。次にその家の前を通った時、私はひたすら犬を無視しました。以前と同じように吠えてきましたが、犬のほうも見ずにただ歩き続けました。すると、犬はあきらめて家の前に引き返しました。数年後に知ったのですが、そういう犬には大きな声で命令すると、たいていキャンキャンと言って逃げるそうです。

結局、私が恐がっている限り、犬が優勢なのです。けれども、私が犬を無視すると犬は去り、もし立ち向かったら、犬は逃げます。悪魔もこの犬と似ています。悪魔が弱いという意味ではありませんが、私たちがキリストのうちにあるなら、悪魔は私たちに対して無力です。

もし悪魔と関わりを持ったら、たとえば悪魔を崇拝したり、応援したり、偶像に祈ったりしたら、もちろん悪魔はその人に対して力を発揮できます。

けれども気づいていただきたいのは、私たちがそれを容認したときに限って、悪魔は力を使えるのです。私たちがそうさせなければ、私たちがキリストのうちにある限り、悪魔が私たちを傷つけることはできません。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。（ヨハネ第一 4:4）

悪魔の策略とは何でしょう。欺きがひとつです。神の真理について私たちが間違ったことを信じるのを悪魔は望みます。神はあなたのことを愛してなんかおられない。他の人のことは愛していても、あなたのことは愛していない。あなたはそれほどいい人ではない。などといった内容です。

私たちは誰でも罪人であるという事実を認識していますか。あなたも私も罪を犯したことがあるとわかっていますか。有罪のまま死んでしまうと永遠の罰を受けることを理解していますか。そのことをわかっていて、イエスに罪を告白し、心から赦しを求めたのなら、もう赦されています。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（ヨハネ第一 1:9）

神が私たちの罪を取り去ってくださいました。ですからもはや有罪ではないのです。イエスにあって、私たちは新しい人です。もしこのことが起こったのなら、あなたはイエスのうちにあります。神はわが子のようにあなたを愛してくださいます。あなたがすでに神の子だからです。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

（ヨハネ 1:12）

悪魔は私たちを誘惑しようと企てます。どうも、私たちの頭にいろんな考えや思いを入れることができるようです。悪魔はイエスにも現れて、父なる神に逆らうよう誘惑しました。また、力を得てそれを誇るように、御父の愛と守りを疑うように誘惑しました。皆さんもその話をご存じでしょう。イエ

スは40日間荒野で過ごし、何も食べずに断食して祈られました。悪魔はそこに現れて、奇跡を起こす力を使って石をパンに変えればいいと、イエスを誘惑しました。パンを食べることに何の問題もありませんが、この場合は、イエスは御父に従って断食していました。悪魔は、「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」と言いました。これに対し、イエスは聖書の一節を使って返答しました。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」

(申命記8:3) 次に悪魔は、プライドにアピールしようと、全世界を支配する力を与えると申しました。イエスはまた聖書の一節から返答しました。「あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ」

(申命記6:13) そして、悪魔はイエスを高い所に連れていき、飛び降りるように言いました。あなたが神の子ならここから身を投げて神が天使を遣わして受け止めてくれるだろうと言いました。つまり、自分を神の子と信じていても、本当はそうではないかもしれないと疑わせようとしたのです。神が本当に救ってくれるか試してみろというわけです。イエスはこれにも聖書の一節から答えました。「あなたの神である主を試みてはならない」(申命記6:16)

これらの誘惑から何を学べるのでしょうか。イエスは誘惑されました。私達も誘惑を受けます。イエスはみことばを引用して誘惑をはねのけました。私達も神のみことばである聖書を知る必要があります。ついに、少なくともしばらくの間、悪魔は立ち去りました。

血肉に対する戦いではなく、霊の領域での戦いであることを覚えておく。

目の前にいる人間が敵だと思うほうが簡単な場合がほとんどです。人からいろんな反対を受けるかもしれませんが、けれども、そういった状況での本当の敵は悪魔です。悪魔は人々にさまざまな形で悪影響を与えようと努めます。私達一人一人がいるべきでないところに道を踏み外すよう働きかけます。私達たちが分裂し、互いに争うのを喜んでいきます。

OICで賛美する曲の中で、「戦いは主のもの」というのがあります。私はこの歌が大好きです。戦いはまさに神の戦いです。私達は、神に命じられた役割を果たすただの兵士です。戦いの勝ち負けは私達たちが左右するものではありません。ただ、任された小さな役割を果たすという責任があります。大きな戦いにやきもきする必要はありません。それは神の仕事です。ただ、神が与えてくださったことを忠実に果たしましょう。

私達たちがしなければならないことがあります。それは祈ることです。祈りは、神との交わりです。神が素晴らしいお方であることを称え、神の御業に感謝します。私達のうちになされる御業、世界中でなされる御業、そしてこれまでの歴史でなされてきた御業に感謝しましょう。自分自身のことや、周囲の人たちのことで悩みや心配があれば、それを神のもとへ携えていきましょう。周囲の人とは家族、友人、キリストにある兄弟姉妹、そして世界中の人たちです。

祈りには距離の問題はありません。何年も前ですが、私達夫婦が日本にいたときに、私の姉がガンと診断されました。12歳上の姉は母のような存在で、私はお姉ちゃん子でした。私は姉のそばにいたい、アメリカに帰りたいと心から願いました。しかし、それは実現しませんでした。私は大阪に派遣されていたからです。けれども、姉のために祈ることができると気づきました。姉から遠くにいる分、もっと祈りました。そして、神が姉とともにいてくださったので、私が姉のそばにいるよりはるかによいことをしてくださいました。私は祈りました。私はこのことに平安をいただき、宣教師としての任期を終えて、姉に会うことができました。姉は、ガンと闘って回復しました。

今この時こそ、私達は神のお働きを祈る必要があります。互いのために祈りましょう。このところの出来事で傷ついた人たちのために祈りましょう。今日ここにいて一人一人のために祈りましょう。教会の指導者たちに、そして一人一人に神の知恵が与えられるよう祈りましょう。愛が満ちるように祈りましょう。

最後に、主にあって強められることを求めましょう。神が私達に与えてくださったみことばである聖書を読む時間を取りましょう。祈る時間を持ちましょう。祈りの中で、神を賛美し、心配事を打ち明けましょう。神の前に静まり、神から慰めと平安をいただきましょう。悪魔に立ち向かいましょう。悪魔は私達に攻撃や非難、誘惑をしかけてきます。けれども、私達をしっかりと立たせてくださるのは、天地の創造主なる偉大な神です。このお方のもとに来る者をすべて救ってくださる救い主なるお方です。恐れず、しっかりと立ちましょう。